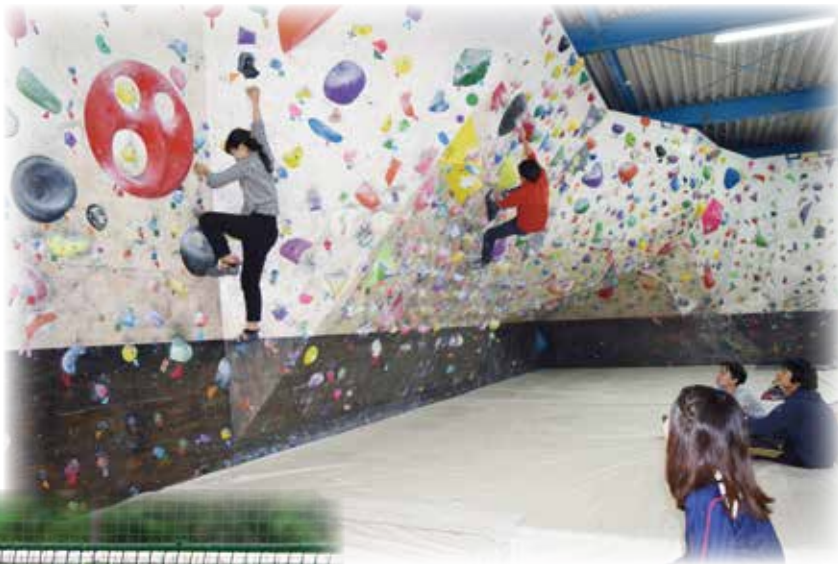


若者×スポーツ

「する」「見る」「支える」「楽しむ方



撮影協力
ノアクライミング&コミュニティ (伏見区)



最近、若者をとりまくスポーツが変わってきたと思いませんか？

スポーツには「する」「見る」「支える」といった関わり方があります。

「する」という関わりでは、ロッククライミングの一種であるボルダリングや、フットサル、サバイバルゲームなど多種多様なスポーツで体を動かす人が増えていきます。一般になじみの薄いスポーツという意味で「マイナースポーツ」という言葉も生まれました。

「見る（観戦する）」というと街中にスポーツバーなどの施設が増え、若者がスポーツを通じて大人数と一緒に盛り上がる、大きなイベントとなってきました。

「支える」形にもいろいろあります。スポーツボランティアやサポーターは、障がいのある人やサッカーチームなどをサポートすることで自身もスポーツに関わりを持てます。

いろいろな関わり方がある若者とスポーツの今について取材しました。

若者とスポーツ事情

ダブルダッチ

いま大学生の間で流行っているのがダブルダッチです。二重の縄跳びとダンスの要素を織り交ぜた競技で、300年以上前にオランダ人がアメリカに持ち込んだ縄跳びの一種です。日本では1996(平成8)年4月に日本ダブルダッチ協会が発足、東京や京都で静かなブームになっています。少し大きめの縄を回しあうスペースがあればよく、ロープ2本と3人以上で簡単に楽しめます。種目によって高度な跳び技があり、コンテストなどで技術を競います。大学の多い京都では、各構内や梅小路公園、鴨川堤でも練習風景を見ることが出来ます。



で練習しています。代表の工学部工業化学科2回生、坂中勇太さんは「場所を取らず道具も簡易で参加できる気軽さがいあってしょうね。縄の回転や跳び技の種類で結構ハードです」と楽しそう。東京と関西の大学を中心に若者の心をとらえ、全国大会や世界大会にも出向いて行くそうです。

スケートボード

スケートボードも盛り上がっています。なかでも南区の「火打形公園」は、京都市内ではじめてスケートボードパークとして整備された公園で、ボーダー達のメッカとなっています。



スケートボードは、車輪のついた板に乗り、滑ったり、跳んだり、トリックと呼ばれる技をキメたりして楽しむ競技です。現在、京都では約2,000名の競技人口があり、子どもから40代くらいまで幅広い層が楽しんでいて、休日や放課後のほか、社会人の朝活や、昼休みでの利用もあります。

「教わるのではなく、楽しみながら上達するスポーツで、難易度も高いです。モチたいと焦る若者は挫折する傾向にあります。個人競技ですが、誰かが周りで滑っていないと落ち着かないといった「一匹狼の群れ」を好む人が多いようです。年功序列より実力主義

で、うまい中学生が始めたばかりの大人にフランクに話しかけるなど、年齢を超えた交流があります。人と出会い、練習で技術を磨いて、写真や動画に記録する…。それぞれ思い出作りのような自由な楽しみ方をしています」と京都スケートボード協会副会長の荒川雄介さんは語ってくれました。

多彩な障がい者スポーツ

卓球バレー

京都市障害者スポーツセンターが1965年7月、左京区高野玉岡町に開設されて50年、大小体育施設や室内温水プールもあって連日にぎわっています。

京都の障がい者スポーツの人気競技は京都発の卓球バレーです。鳴滝養護学校の教員片山美代子さん(故人)が卓球とバレーボールのルールを混ぜた競技を考案しました。選手6人ずつが卓球台のネットを挟んでコの字型に座り、長さ30センチメートルの板を片手に、鈴の入ったピンポン球を転がし合います。味方でパスしながらネットの下を3打以内で相手コートへ打ち返すというチームプレーです。ゲームはイスや車イスに座ったままできるので、若者から高齢者まで楽しめます。全



京都卓球バレー大会を開くと約100チームの参加があるそうで、現在では、全国各地にも広がりを見せ、全国大会も可能です。

「世界にはばたけ！大学生スイマー」

障がい者の水泳界で、1年間に5つの日本記録を出した近畿大学1年生の「ノ瀬メイさん」。世界大会でも活躍する選手です。

物心ついたときから近くの京都市障害者スポーツセンターを利用して、水泳を続けてきました。紫野高校の水泳部にいたころは、放課後も同センターやスイミングで夜9時まで泳ぐ日々を過ごしました。

そのころ全国高校生英語スピーチコンテストで、スイミングスクールなどの出来事を通して「社会が障がいを作ってしまった



う」と訴え、見事に優勝しました(彼女は先天的に右腕の肘から先がありません)。水泳でも、英語のスピーチでも、そんな「伝えたい」という想いと何事にも本気で取り組む強い意志、努力が彼女の原動力になっています。今の目標は東京パラリンピックで優勝し、世界大会で出会ったアスリート達のような自立した自分になることです。

若者スポーツのいまむかし

山下高行 立命館大学教授インタビュー

——若者のスポーツへの関心についてどのような変化が見られますか。

1990年代から「する」スポーツの形が変わってきたと思います。それまでは体育として、主に教育の枠内で行われていました。その代表例が甲子園の高校野球スタイル。努力、根性、チームワークなどを掲げ、ひとりでも不祥事を起こせば、チームが出場停止になります。それまでスポーツ選手というと丸坊主のイメージでしたが、Jリーグができたとき、この枠組みが崩れていき始めました。茶髪や金髪も受容され、スポーツは文化だという考え方もこの頃誕生しました。

「支える」という参加型のスポーツボランティアやサポーターという考え方も、フランスW杯やJリーグが出来た時に生まれた最近のもので、Jリーグをつくる時に、野球のような応援団ではなく、一緒にチームをつくっていくサポーターという概念が新しく生まれました。サポーターが地域の活性化をどうするか一緒に担っていて、そのモデルを元に

文部科学省の総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業もできました。

同じ頃、少人数で遊びを取り入れた、型にはまらないスポーツが静かに広がってきました。これはスポーツが商業的に注目されてきたことにも関係します。これまでスポーツとダイエツトや、スポーツとファッションなんて誰も思いつきませんでした。だから今の若者は、昔に比べると多様性に富んだスポーツを行っているといえます。

——先生は授業の中で学生が障害者スポーツセンターへ行くようにしているとのことですが…

障がい者スポーツに関しても、知らないということが大きいです。知らないからどこか同情的になっってしまう。でも、知れば障がいのある人もさまざまな個性を持った人がいることが分かっています。経験的に理解し、多様性を認め合うということは、これからの多文化社会では必要とされるで

しょう。今回、一ノ瀬さんが障がいのあるアスリートとして活動する場がなかったというのもそのあたりに関係してくるのではないのでしょうか。障がいのあるなしではなく、多様性を持った一人の競技者として認め合うことが大切だと思います。

——最近の大学生を見ていてどう思いますか

いまの大学生は、アルバイトなどに追われていて時間やお金がないことが多いですね。

スポーツボランティアにも一緒になつて盛り上げるイベント型には参加がありますが、継続的に一緒に担っていくボランティアは定着していません。そういうことをしているのは、30〜40代の社会人が多くどうやって若い人を巻き込んでいくかが課題です。

若者たちは集団ではなく小グループで集まり、結びつきが広がっていないようにも見えます。ボランティア



プロフィール

山下 高行
(立命館大学産業社会学部
現代社会学科教授)
1954年生まれ。筑波大学
大学院スポーツ社会学博
士課程。Jリーグのサポ
ーターや、体育・スポーツ
の戦後初期改革など研究。
共著『現代スポーツ論の
射程』(文理閣)出版。

アは奉仕だという人がいますが、むしろ足りないところを助けあう、まちづくりに似ています。小グループの関わりで完結するのではなく、スポーツボランティアという形で参加したり、サッカーのようなサポーターとして一緒にチームをつくる中で地域との関係を考えたりと、若者がスポーツを通してより支え合っていくことを期待しています。